中日本版

各地の話題

支援事業で遊休農地解消を後押し

農委会の要望で補助拡大も

長野 飯山市





上雑草が繁茂する荒廃農地、下同地をソバ畑に再生

【長野】飯山市では近年、農業委員、農地利用最適化推進委員、営農組合などで組織する「農業再生センター」が遊休・荒廃農地の解消に積極的に取り組んでおり、市も再生経費に対する独自の補助金として「遊休荒廃農地対策支援事業補助金」を設けこの機運を後押ししている。

昨年、同市農業委員会は、市に対し大規模な農地再生にも対応できるよう、この補助金の拡充を要望したところ、この補助市はこれに応え、本年度から補助対象面積の拡大と認定農業者に対する補助額の増額が実現した。

この補助金や長野県農業開発公社の遊休農地解消対策事業を活用し、今年も荒廃農地の再生が進められており、樹木が生い茂った荒廃農地をかつての畑に復旧した例も生まれている。

こうした農業者の熱意と行政の支援により、原野化していた荒廃農地の再生活動が少しずつ進められている。

所有者不明の遊休農地を担い手へ

岐阜・美濃市農委会

法制度活用し貸し付け



打ち合わせをする委員ら

【岐阜】美濃市農業委員会（渡辺基成会長）は、所有者不明農地制度を活用し、担い手への集積・集約と遊休農地解消につなげている。

きっかけは、極楽寺地区の担い手からの耕作意向を受け、同委員会が所有者へ利用意向調査を行ったこと。調査により貸借が進んだ一方、利用意向が確認できない農地20㌶が浮かび上がり、農業委員が関係者への聞き取りを行ったところ、登記名義人が死亡しており、相続登記がされていない農地であることが判明。所有者不明農地制度を活用して解消をめざすことになった。

昨年10月から調査を進め、相続人の一人が存命であることを確認。同年12月に貸し付けへの同意を求めて簡易書留を送付したが到達せず返送されたため、2月に農地法に基づく公示を行った。

農業会議や農地中間管理機構などと綿密に打ち合わせをして進め、借り受け希望者には賃貸借で借り受けできるかを確認した。貸し付け後は遊休農地解消緊急対策事業を活用して草刈りを行い、野菜生産に活用する予定で、同地区の遊休農地はこれでゼロになる。

今回の取り組みをモデルにして、同委員会では他地区にも取り組みを広げ、所有者不明農地の解消と遊休農地の発生防止につなげていく。

京都・南丹市農委会

「農地なんでも相談会」多彩な相談に対応



市内4カ所で「なんでも相談会」を開催（8月7日、美山会場）

【京都】南丹市農業委員会は8月7日、市内4会場（園部、八木、日吉、美山の旧4町）で「農地なんでも相談会」を開催し、「農地を売りたい・貸したい」（9件）と「農地を買いたい・借りたい」（3件）が過半を占めたが、それ以外に「相続した農地の管理に困っている」「獣害で崩れた畦を補修してほしい」「田を果樹園に変えたい」「市内で新規就農したい」など多彩な相談が寄せられた。

この相談会は、昨年度から年2回開催している。市内全戸にチラシを配布して市民に周知しており、相談を受けた委員の活動を通じて農地の貸借や売買につながったケースもある。

農委会の浅田均会長は「なんでも相談会を通じて、農家に農業委員会の活動が見えるようになった」と話している。

大阪から夫婦で移住・就農

農産物はカフェのメニューに

兵庫・三木市 藤井大輔さん・恭子さん



朝採れ野菜のランチが人気のカフェ前で大輔さんと恭子さん

【兵庫】三木市で野菜やハーブの水耕栽培を行う藤井大輔さん（48）と恭子さん（46）は、ハウスの隣にカフェ「bi rica COFFEE & FRESH VEGS」を併設し、自ら栽培した農産物を使ったメニューを提供している。

神戸市出身の大輔さんは、大阪市で会社員をしていたが「田舎でしかできない仕事をしたい」と若いころからの夢をかなえるために退職。2014年に家族で大阪市から三木市に移住した。

夫婦で農業研修を受けて17年に就農。カフェの開業も計画していたため、天候に左右されず、通年で収穫できる水耕栽培を選んだ。

19年に開業したカフェでは、ハウスで栽培した「野菜たっぷりのメニュー」を提供。新鮮な野菜販売と併せて人気スポットになっている。

休みの日には地元の行事に参加したり、カフェの隣にある公民館にコーヒーの出前をしたりして地域に定着し、常連客も多い。大輔さんは「地域の方々に支えられ受け入れていただいた。自分たちがいて良かったと感じてもらえるように、がんばりたい」と笑顔で語った。

愛知 なごや陽向の会

都市農業の持続訴えシンポジウム

「消費者理解の浸透を」

【愛知】名古屋市議会議員の金城ゆたか氏と野田留美氏の所属会派「なごや陽向の会」は、このほど名古屋市内で「都市農業シンポジウム～持続可能な都市農業とは？～」を開催した。食の安全・安心を支えるだけでなく、環境保全や防災、地域のつながりにも貢献している都市農業の持続のために何をすべきかを考えるもので、農業関係者150人が参加した。

農家でもある野田氏は、名古屋市の都市農業の現状について講演。市内の樹林地、芝・草地、農地などを合わせた緑被地の割合（緑被率）が1990年の29・8％から2025年の20・4％へ、35年間で9・4％減少し、中でも農地の減少が最も大きく1455・5㌶減少したことを指摘した。また「農地は、農産物生産だけでなく景観や防災など多面的機能がある。名古屋市では野菜の自動販売機の導入補助を始めた。都市農業の持続のために、地産地消など自分でできることを考えてほしい」と話した。

東京大学大学院の鈴木宣弘特任教授が「食料危機時代の都市農業」と題して講演したあとパネルディスカッションが行われ、①後継者がいても相続税などによって続けられないことが多い②持続可能な都市農業の実現に向け消費者理解の浸透が必要――などと訴えた。



都市農業を巡るパネルディスカッション

和歌山・田辺市 大前拓也さん

独立リーガー 新規就農してミカンづくり

野球と農業「共通点ある」

【和歌山】「野球と農業には体力が必要なことはもちろん、栽培技術や資金、資材の管理などに自分の頭を使うという共通点がある」と語るのは、田辺市で不知火、早生ミカンなどの柑橘とウメを栽培する大前拓也さん（32）。大前さんは同市に隣接する白浜町の出身。10代の頃から野球の独立リーグに所属し、NPB（日本野球機構）の選手をめざし、関西や九州などの7球団で活躍した。29歳で現役を引退。現役時代に農家でアルバイトをしていたことから農業に関心を持ち、地元の指導農業士のもとで1年半の研修を受けた後、新規就農した。現在は栽培技術の向上をめざしているほか、経営規模の拡大に向け借りられる農地を探している。

「手をかけた作物がうまく育った時にやりがいを感じる。他の産地に負けないよう、もっと田辺のミカン栽培を盛り上げたい」と意気込む。

大前さんの普段の活動は、自身のインスタグラム（二次元コード参照）で見ることができる。



「年々独立リーグのレベル向上を感じている。地方でしか味わえないプレーがあると思うので、ぜひ近くの試合を見に行ってほしい」と大前さん

OOMAE_FARM

寄稿

中山間地は水害見据えた圃場整備を

新潟・魚沼市農業委員　小岩孝徳

【新潟】魚沼市で8月8日、1時間に100㍉を超える記録的な豪雨が発生した。中山間地の豪雨災害で発生が多いのは「畔の崩落」で、田んぼが豪雨の水圧に耐えられなくなり畦畔ごと土砂崩れになるケースがある。

平場の畦畔と違い中山間地では、崩れた後の復旧に多大な時間と費用がかかる。災害が発生してから数カ月間手付かずのところもあり、被害が大きいところでは翌年の復旧開始になる見込みだ。

中山間地の圃場は30年以上も前に整備したところも多く、畔が痩せて低く脆くなっている。当時の圃場整備は、現在のように表土を剥いで成形してからならすという工程ではなく、表面をそのままブルドーザーで平らにすることもあった。その結果、下層に表土だった黒ボクの層が埋まり、畦畔の強度を下げる原因となる。

中山間地の圃場整備を進めるにあたっては、崩れにくい土で畦畔を成形したり、谷側の畔を農道にして大きくしたりする工夫が必要となってくる。



豪雨で崩れた畦畔